

静かな生活 画壇の仙人・熊谷守一の生き方

私の長生きのコツは無理をしない、無理をしないでやってきたこと

作家や画家など芸術家の中には、猫好きの人が多く、作品化するほどのめりこんでいる人もたくさんいます。明治から昭和にかけて活躍した彫刻家・朝倉文夫は自宅に猫を15〜6匹飼って、絶えず観察して身のこなしやしぐさを見事な作品に仕上げています。東京の台東区にある朝倉文夫彫塑館で観ることができるので一度出かけてみては如何でしょうか。

そして、その朝倉と同時代に活躍した画家に熊谷守一という人がいます。ちなみに朝倉は明治16年生まれ、熊谷は明治13年生まれ。共に美術家として日本の美術史に燦然と輝いています。

として静謐。自然体です。生涯を猫と共に暮らし、猫の身になって家への出入り口も通り道を作り、猫が生活に困らないように工夫していたといえます。

複雑な家庭環境で育った守一は、普通の生き方を選ばないところがありました。例えば、東京美術学校を首席で卒業し、文展にも入賞し、注目されたにも関わらず、樺太調

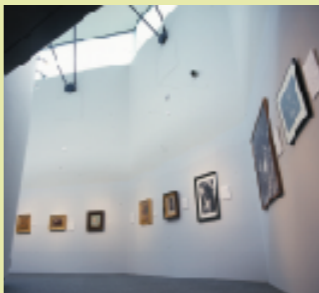
今回、紹介する熊谷守一は中津川共立クリニックのある岐阜県生まれ。岐阜市の初代市長の三男。幼少の頃、生母と離れ、父親の妾の住む家で暮らした経験をしています。時に生家に戻ると母親は細々と暮らしている。一方、妾宅は贅沢な生活。子ども心に「なんとたらことだ」と思ったといえます。



この熊谷守一もまた猫が好きでした。猫の自由さを愛して、共に暮らす中で猫たちの姿をたくさん描いています。画壇の仙人と呼ばれる孤高の画家として今尚多くのファンに愛されています。画風は淡淡的

査団に加わり、2年間北海の島々を巡っています。また故郷の岐阜に戻り筏流しの仕事を6年間続けたなど規格外の人間でした。

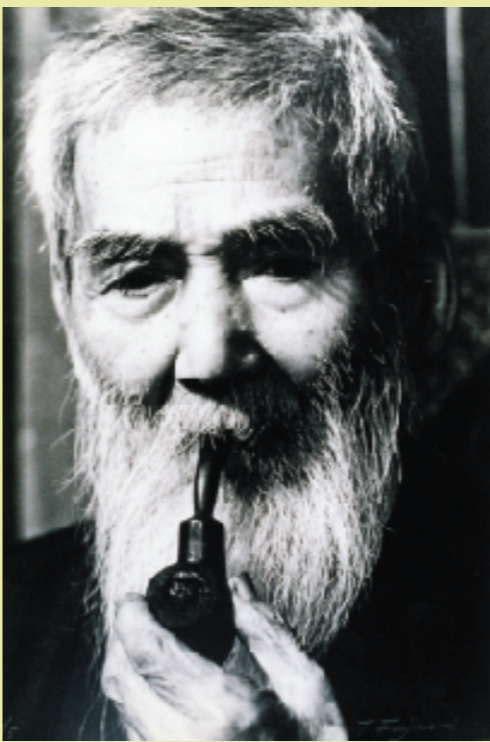
小学校の頃には、先生から「偉くなれ、偉くなれ」と言われても守一人を押しつけて前に出るのが大嫌いで、皆が偉くなったらどうするんだと子ども心に思ったほどだったといえます。



故郷の岐阜県中津川市付知町にある熊谷守一記念館
写真提供：熊谷守一記念館
☎0573-82-4911
www.tsukechi.co.jp/



岐阜県中津川市付知町の穂の湖自然公園のそば畑
写真提供：坂下総合事務所産業振興課



熊谷守一(くまがい もり)1880~1977は岐阜県中津川市付知町出身で日本の近代美術史に大きな足跡を残した孤高の画家。「画壇の仙人」と称された。愛知県美術館の「木村定三コレクション室」にも熊谷守一の作品が展示されています。



熊谷守一美術館 ☎03-3957-3779
www.kumagaimori.jp
朝倉彫塑館 ☎03-3821-4549
www.taitocity.net/taito/asakura

す。そうして「私は生きているのが好きだから、他の生きものも皆んな好きです。」と嘯っています。

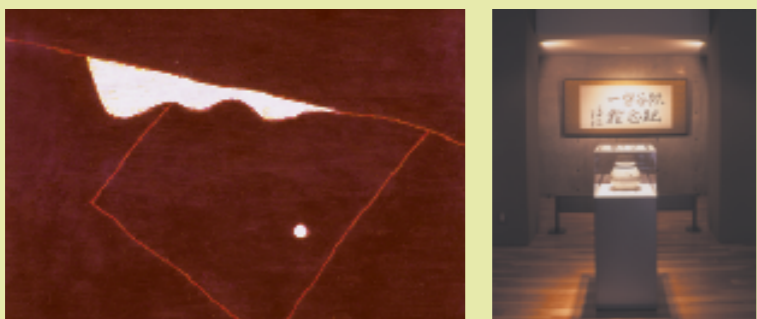
そんな彼ゆえに画家として認められてからも世間のモノサシとはかけ離れた考え方を持っていました。国家からの文化勲章を辞退したのも彼ならではの理由からでした。その理由というのは「そんなものを貰ったら来客が増えて困るから」だといふものでした。



無理をしないで生きていくことを生き方の根底に持っていたのです。とにかく働かないで好きなことをして毎日を送れば良いという考え方で、ただひたすら絵を描いていたのです。ある世論調査によると「どのような生活を望むか」と聞かれ「来客のない静かな生活」と答えた人が約3割近くいたようですが、守一もそうした思いの人だったのでしょう。

だからといって人間嫌いではなく、生活苦の中でも5人の子供も作っています。しかし、どんなに家計が大変でも気が向かなければ絵筆を取ることはなく、ただ昆虫や小鳥、草花や猫を眺めていたといま

東京の豊島区に彼が晩年を過ごした場所に熊谷守一美術館が建っています。秋の一日、駒込共立クリニックにおいての方は、朝倉文夫と熊谷守一という二人の猫好きの芸術家の美の世界に触れる小さな旅を試してみても如何でしょうか。心を自由気まま、ありのままに生きてみる。そんな一日があるように思います。



熊谷守一の作品、上は「猫」(1965年)、下左は「泉」1969年、守一の生き方が心にしみ、静かで清楚な記念館には、自分の気持ちに正直な生き方の語録集や書の作品も多く展示されているほか、当時の絵の具箱や自作のパイプなども展示もされています。